

6. 地域材の流通に関する調査研究

木材センターの木材価格及び木材使用量調査

鳥海晴夫

〔目的〕

「住宅の品質確保等に関する法律」(以下「品確法」)が2000年4月に施行された。瑕疵担保保証責任の10年義務化や住宅性能表示制度の導入で、木材のニーズ(品質、性能等)が大きく変化してきたといわれている。そこで、木材センターの木材取引状況や木材の使用状況を調査し、いま消費者が求めている木材ニーズを把握し、ニーズにあった施業方法を提案する。

〔方法〕

1. 木材センター取引調査

多摩木材センターは、2004年4月から2004年12月まで、毎月2回、取引のあった全木材について調査した。調査項目は、樹種、長さ、直径、本数、材積、落札価格、材質(曲がり、節等)等である。特に、高値や安値で取引されたものは、木材ニーズに直結しているため、その要因の把握につとめた。

近県の木材価格の比較では、多摩木材センターで購入している製材業者が多数参加している埼玉県飯能市の吾野原木センターで、2004年8月から2004年11月まで月1回調査した。

2. 木材使用量調査

多摩地区で建設中の28戸の木造軸組住宅について単位面積当たりの木材使用量(m^3/m^2)を調査した。使用量は、現場での実測、木拾い表及び聞き取りによって調査したが、13戸については一部不明な点があったので、残りの15戸で分析した。

〔結果〕

1. 多摩木材センター取引調査

(1) 全体の取引状況

取引量は、夏・秋期が少なくなっているが、この時期は辺材部に穿孔虫が入っていることが多いことが影響していると思われる。特に、6月の平均価格は約12,000円/ m^3 と安く、最も高かった10月の6割程度であった。10月に取引量が少なかったのは、センターの一部を資材置場として貸付けたことが影響している(図-1)。

(2) スギ・ヒノキの取引量・木材価格

樹種別取引量は、スギ70%、ヒノキ25%、その他5%となっているが、その他の中にマツ・サワラなど16種入っており、開発に伴う伐採木の入荷で樹種の多いことが多摩木材センターの特徴の一つになっている。スギの月別取引量は、6月の660 m^3 以降減少傾向にあるが、ヒノキは100 m^3 前後の推移で比較的安定している。スギ・ヒノキの月別価格は、6月から9月まで安値で安定していたが、10月に急騰し、その後やや高値で推移している。これは、取引量が少なかったこともあるが、聞き取り調査によると、学校や公民館建設等の公共事業に多量の木材を使用したことが影響しているといわれている。4月から12月の平均価格は、ヒノキが約22,000円/ m^3 、スギが約11,000円/ m^3 でヒノキがスギの2倍前後で推移しており、この傾向は昨年とほぼ同様である(図-2)。

(3) 間伐材の取引量・平均価格

多摩木材センターでは、間伐材として未口直径が「8~12cm」と「7cm以下」の2種類に分け、それぞれ樹種別に一山として本売り(1本当たりの単価)でセリにかけられている。

「8~12cm」の間伐材は、ヒノキがスギの3.7倍多く入荷されているが、ヒノキの平均単価が570円/本とスギ、440円/本と比較して高いことが影響していると思われる。「8~12cm」前後の間伐材は、一部丸みの

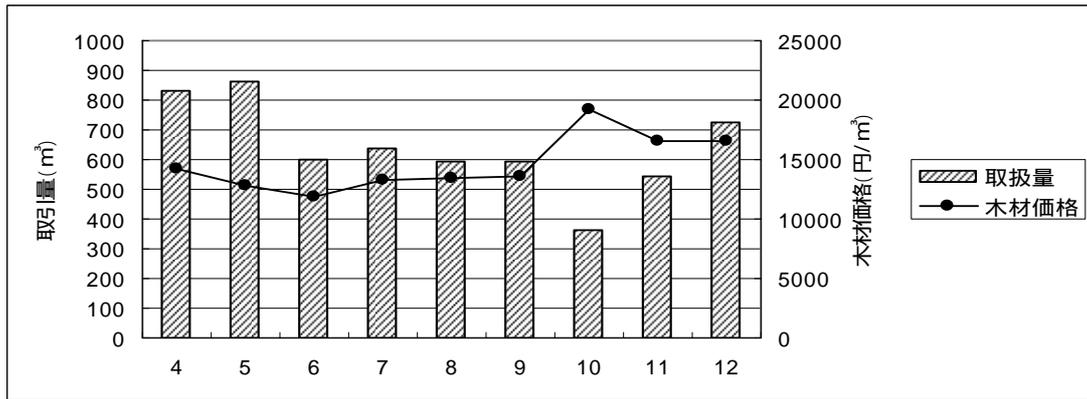


図 - 1 多摩木材センター取引量・木材価格

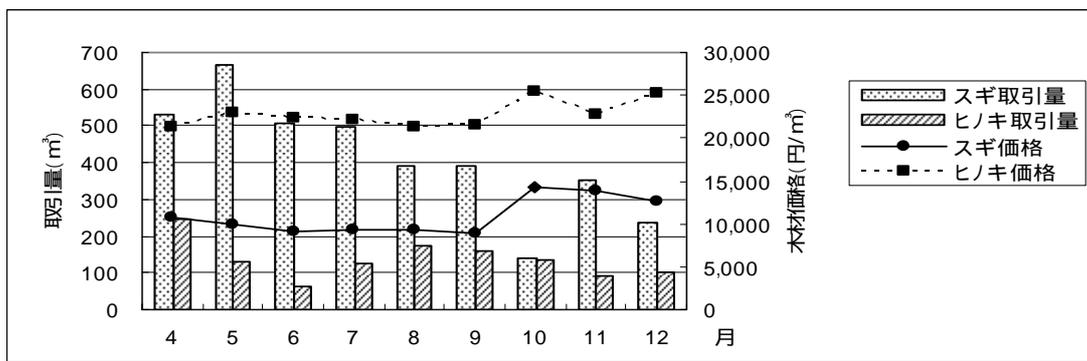


図 - 2 スギ・ヒノキ取引量・平均価格

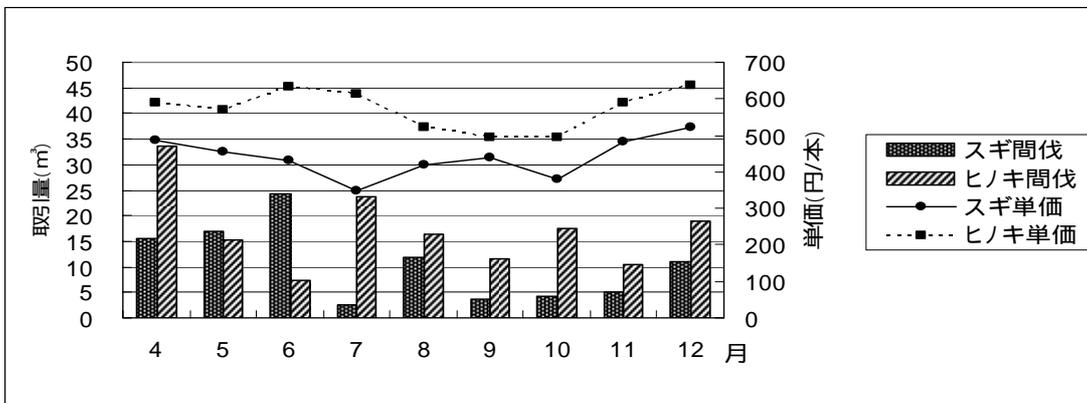


図 - 3 間伐材スギ・ヒノキ取引量・平均単価 (4m, 8~12cm)

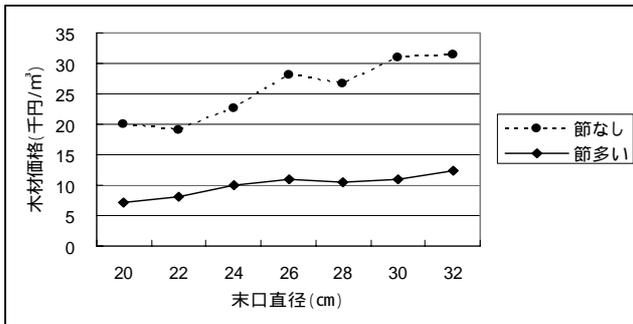


図 - 4 節の有無とスギ材価格 (4m)

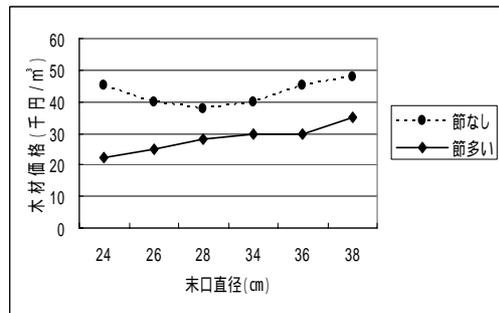


図 - 5 節の有無とヒノキ材価格 (4m)

ある角材がとれる可能性があるため比較的高値で取引されているが、「7cm以下」では杭の利用が主であり、300円/本前後の安値で推移している(図-3)。

(4) 節の有無と木材価格

平成15年度のアンケート調査で、無節にこだわる人が1割程度いることがわかったので、節の有無と木材価格について調査した。節の有無については、木口の枝打ち跡、樹皮の枝跡等で区別したが、無地の角材がとれるかどうかまでは判定できなかった。

節のない木材は、スギ・ヒノキとも元玉全体の1.6%と少なく、現在入荷している木材はほとんど枝打ちが行われていない。青梅林業は、もともと足場丸太生産を中心にした施業体系で木材生産しており、角材生産を目的とした施業体系へ移行する過渡期の森林が伐採時期に達してきたと思われる。

スギ無節材は、節ありと比較して平均で2.5倍の高値で取引されていた。直径が大きくなるほど価格差が広がり、30cmで20,000円/㎡の差がついた。ヒノキ無節材は、節ありと比較して平均で1.5倍の高値で取引されていたが、スギほど太さに左右されることがなかった。ヒノキは節が美しく、スギのように死節が穴になることが少ないためと思われる(図-4、5)。

(5) 玉切り箇所と木材価格

スギの場合、「元玉」と「2番玉以上」の比較では、末口直径が18～26cmまではほとんど価格差がなく、30cmで以上になると「元玉」が約4,000円/㎡高くなった。ヒノキは、末口直径が22cmまでは「元玉」が安い、30cmになるとスギ同様約4,000円/㎡高くなった。売り子は元玉を強調してセリにかけため、すべての元玉の高いと思われたが、末口直径が26cm以上から高くなることがわかった(図-6、7)。

(6) 曲がりの有無と木材価格

「曲がり」の有無は、木材に「曲がり」と表示されたものやセリ時に指摘されたもので判断した。スギの「曲がり」は、末口直径による差がなく7,000円/㎡前後の安値で取引されているが、「曲がり無し」の場合は太くなるにつれて「曲がり無し」との価格差が広がり、26cmで5,000円/㎡以上の差がついた。ヒノキは、「曲がり無し」が太さに関係なく価格差があり、「曲がり」に比べ平均で5,000円/㎡以上高かった。元玉で出荷する場合は、雪害等の影響で「曲がり」木が多いので、曲がりの部分を除いて採材する必要がある(図-8、9)。

(7) 近県の木材価格の比較

多摩木材センターと吾野原木センターの8月から11月までの木材価格について比較した。スギの木材価格は、末口直径が18cm以下では多摩木材センターが吾野原木センターに比べ若干安かったが、20cm以上では多摩木材センターが高く、平均すると3,100円/㎡の高値で取引されていた。ヒノキは、すべての末口階層で吾野木材センターが多摩木材センターを上回り、平均で約23,000円/㎡高かった。吾野木材センターは、ヒノキの大径材・入荷量が多いため、関西方面からヒノキ専門の原木業者が参加して、常に多摩木材センターより高値で取引されている(図-10、11)。

2. 木材使用量調査

当初は、部材別の多摩産材の利用状況を調査する予定であったが、多摩地区では製材所と大工・工務店の結びつきが強く、多摩産材がどの部材でも使われていることがわかったので、木材使用量調査に変更した。

15戸の木造軸組住宅は、1戸当たりの平均床面積が123㎡であり、全国平均(120㎡)とほぼ同じ住宅が対象となっている。単位面積当たりの木材使用量は、平均で0.185㎡/㎡であり、全国平均(0.198㎡/㎡)より少なかった。部材別では、構造材(柱、土台、梁、桁等)が80%、造作材(鴨居、敷居等)が9%、下地材が8%、仕上げ材が2%であった。なお、多摩産材を使用していたのは2戸のみであったが、全体に産地までわかる木材は少なく、木材の流通は多岐にわたっていた(図-12)。

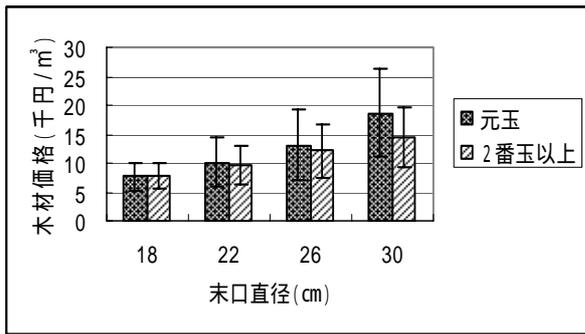


図 - 6 玉切り箇所別スギ材価格 (4 m)

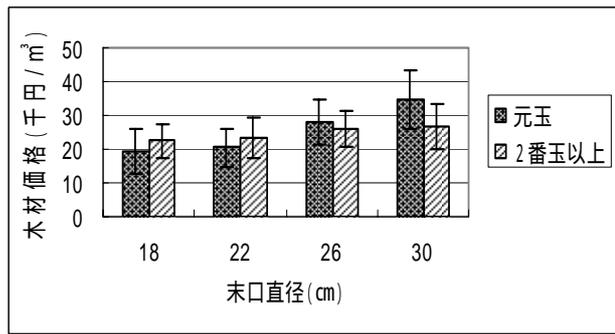


図 - 7 玉切り箇所別ヒノキ材価格 (4 m)

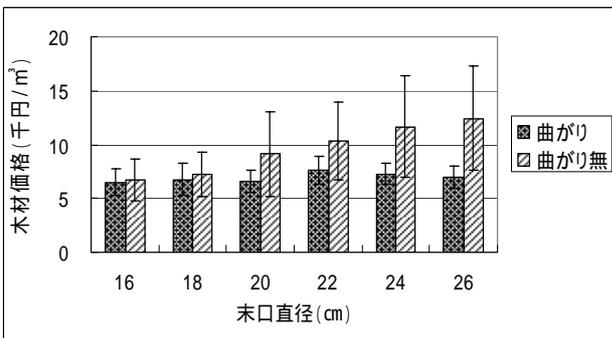


図 - 8 曲がりの有無別スギ材価格 (4 m)

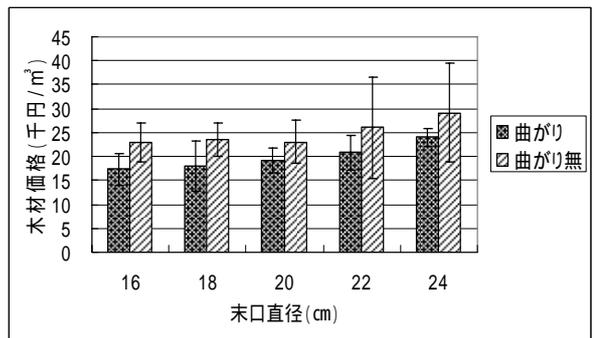


図 - 9 曲がりの有無別ヒノキ材価格 (4 m)

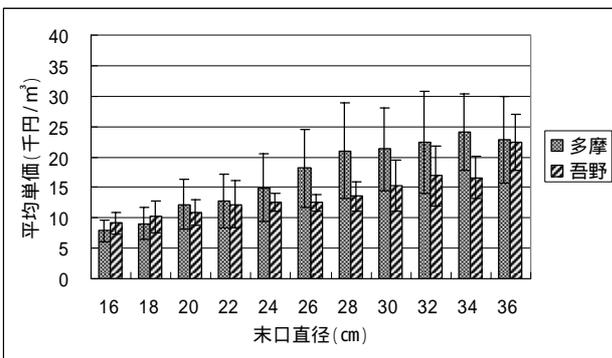


図 - 10 市場別木材価格(スギ4 m)

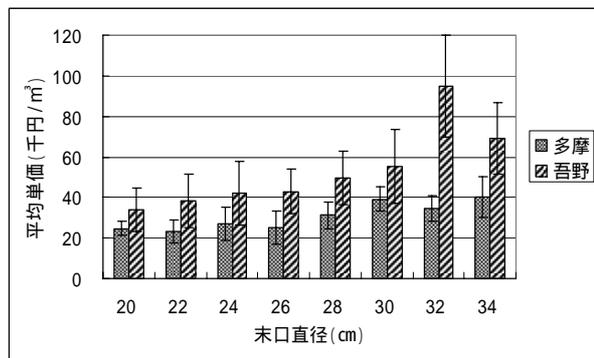


図 - 11 市場別木材価格(ヒノキ4 m)

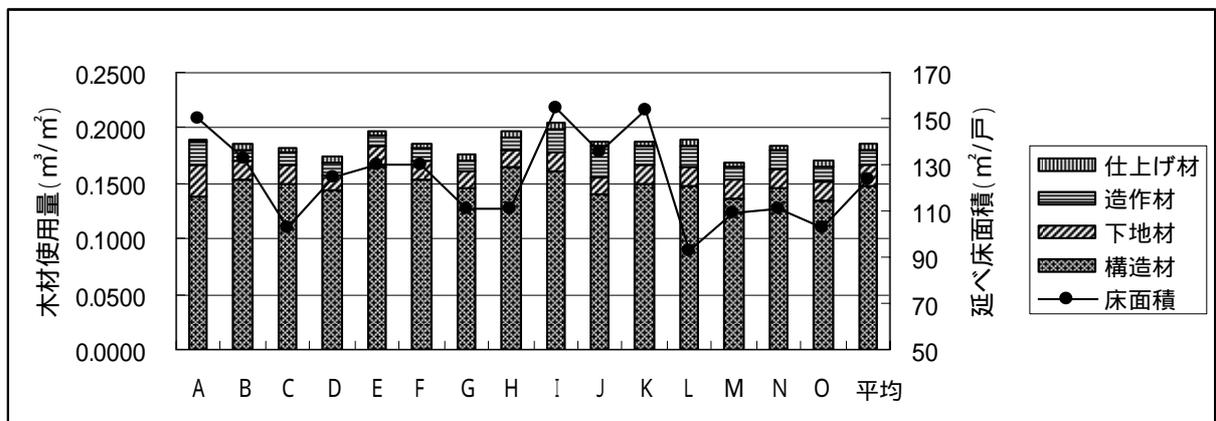


図 - 12 単位面積当たりの木材使用量